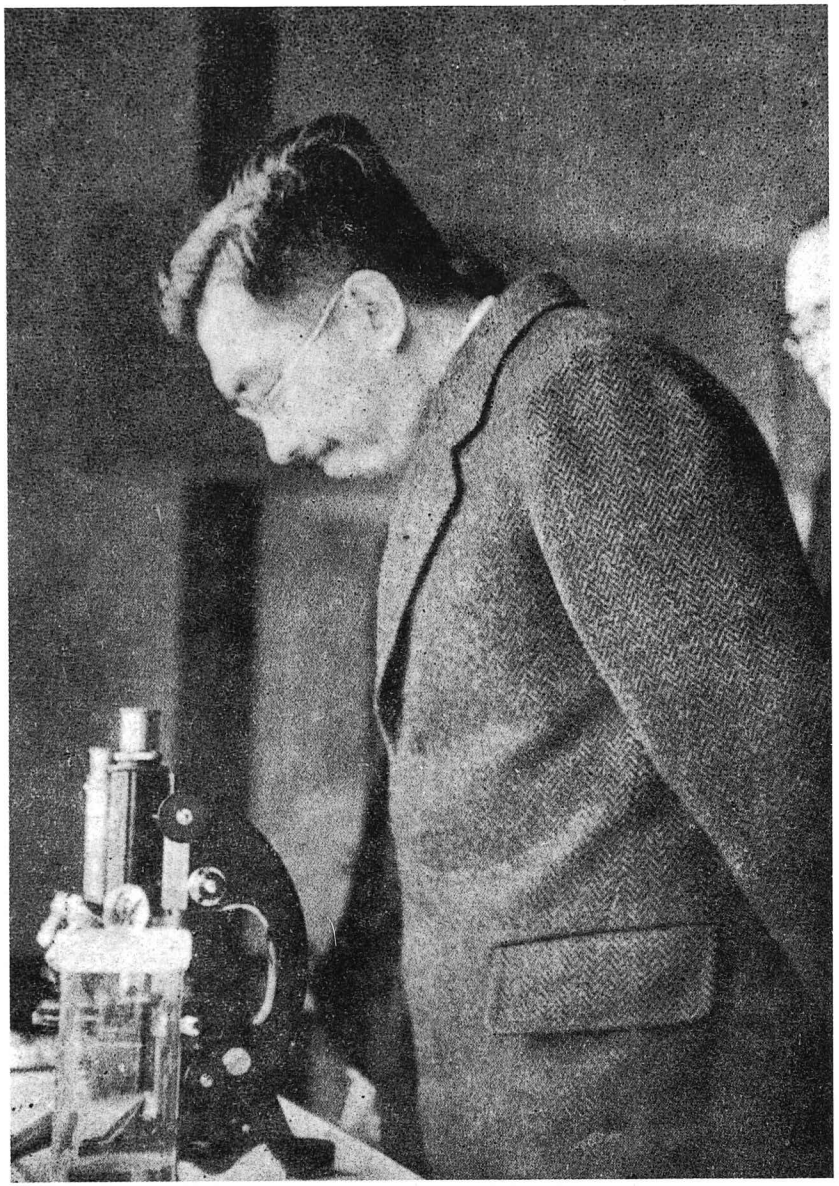
広島戦災児育成所（佐伯郡五日市町）
原爆による痛ましい傷跡を見つめられる陛下の御目に…
（本文参照）

広島戦災児育成所
父母を慕い出家の少年僧達

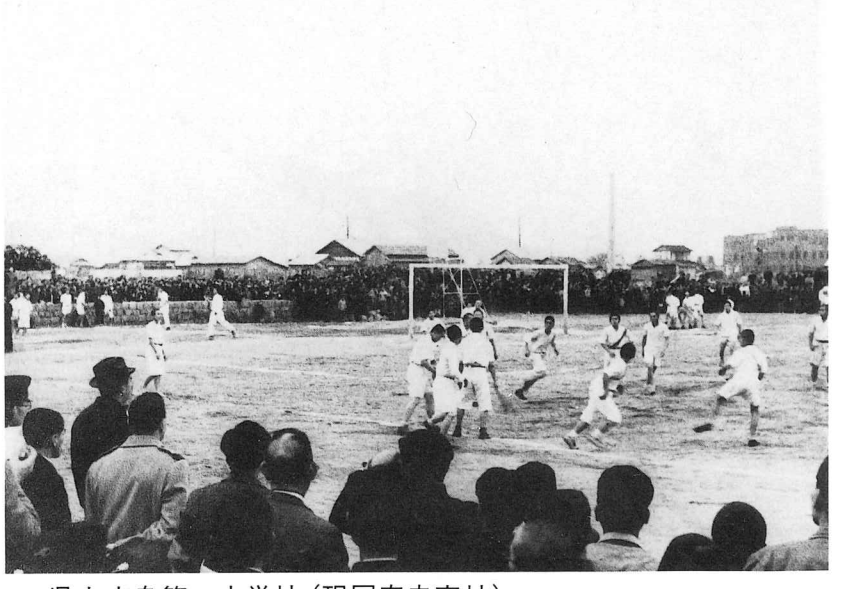
広島市民奉迎場（基町）
広島市民に対してお言葉をかけられた

広島市民奉迎場（基町）
人々のまなざしは全て台上の陛下に注がれた



広島県水産試験場（草津町）
顕微鏡でカキの幼生を御観察

授産共同作業場（基町）
似島学園、新生学園の園児達にお言葉



県立広島第一中学校（現国泰寺高校）
生徒達のサッカーの試合を御覧になった

広島市役所　屋上から広島市街地を御展望

広島市

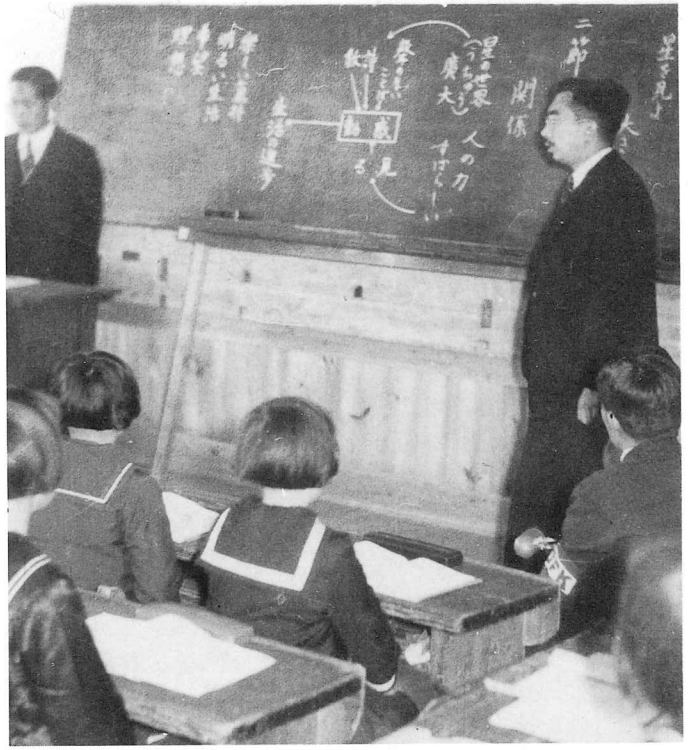
廿日市町御通過

――観光道路上の感激――

十二月七日、午前九時二十分、御召艇で宮島口桟橋にお着きになった陛下は、ここからはお車にお乗りになり、いよいよ広島市へ向かって進まれた。国道の両側では陛下をお迎えする人々の「万歳！万歳！」の声が、お車が進むに従い寄せては返す波のようにこだましている。陛下はお車の窓にお顔を寄せられたまま、ていねいなご会釈を続けられていた。

その時の情景を当時、広島県立第二中学校五年　林豊君は次のような文章に綴っている。

「廿日市御通過は、九時五十分過ぎとのことだ。陛下の御宿地厳島は霧でかすみ、何となく威厳の趣をあたえる。気づかわれた天気も、どうやら晴れて瀬戸内海は美しく輝いて



袋町小学校、広島市立第五中学校

広島県庁
県民代表の奉迎にお応え

見える。九時過ぎというのに沿道は、はや奉迎の人で一杯だ。モーニング姿の紳士、紋付袴の人、和服洋服とそれぞれ着飾った人々が次々と人の列を作っていく。時計は九時五十分を過ぎた。あたりはしんとする。地鳴りのように万歳の連呼が聞こえる。たしかに万歳だ。しかし今度は近くで先駆車が通る。緊張の気がただよう。前部を朱塗りした菊の御紋章輝く車。ガラスを通して陛下の御慈愛満ちた御顔が！胸に何か熱いものがこみ上がってくるのを感じ、思わず万歳を叫んだ。自分だけではない。皆が皆、しかも腹底から。陛下は御満足そうにお手高く帽子をお振りになってお応えになった。ほんの瞬間的な出来事であったが、陛下と我々との間には、一しおの親しさ、懐しさを感じた。自動車は通過した。人々は感激に酔ってか暫く立ったままだった。」

広島戦災児育成所

――ほほをつたう陛下のお涙――

午前九時四十五分、白百合楽団の「君が代」吹奏の中、お車は、広島戦災児育成所の八十四

名の戦災孤児がお待ち申し上げる佐伯郡五日市町吉見園前（現在広島市佐伯区）に静かに止まった。

広島戦災児育成所は、設立者で参議院議員の山下義信氏が県当局を通じて陛下の御視察をお願い申し上げていたものであり、同所は国道から外れ道幅も狭いため、園児・職員が国道筋までお出迎え申し上げていたのである。そして陛下の行幸を仰ぐ喜びを同所の保母松村さんは次のように述べている。

「なにもかも不自由しながら奮闘したあの当時の苦労も夢でした。嬉しさで胸が一杯です。今日もお昼食の時に食べざかりの男の子が御飯を残しますので聞きますと、やはり嬉しくて御飯が喉を通らないのだそうです。」

吉見園前の奉迎場には、最前列に前年十一月、僧籍に入った五人の少年僧がいじらしい姿で並び、その後に各方面から寄せられた心づくしの衣服を身につけた七十九人の園児がお待ち申し上げていた。山下義信所長が前に進み出て、「陛下、広島の戦災児を収容している広島戦災児育成所の孤児八十四名がお迎えしております。私は所長参議院議員山下義信でございます。」と申し上げると、陛下は

「社会事業に尽力してくれてありがとう。しっかりやって下さい。」
と、おっしゃり、すぐ戦災児の前に立たれた。
そして最前列で、左手に数珠、右手に中啓を持ち、合掌するように静かに礼をする、黒染の僧衣に身をつつんだ五人の少年達にお目を止められた。この時の陛下のお顔は、「この子供達はどうしたの」というようなご表情であったが、山下所長から「陛下、この五人の子供は西本願寺の僧侶になったのでございます。お目を止めて下さいまし。」との説明をお聞きになり、はじめて
「ああ・・・そう。ああ・・・そう。」
とおうなずきになった。
この少年達は、原爆で一瞬にして孤児になり、両親の菩提を弔うため前年十一月十五日、京都西本願寺で仏道に帰依した増田義修君（十三才）、谷口義春君（十四才）、今田義泰君（十四才）、川井義秀君（十五才）、河村義尚君（十六才）で、陛下はこの原爆少年僧一人一人の顔をのぞき込まれるようにして
「どうかしっかり勉強して下さいね。」

と、御心にあふれる何ものかを押さえるようにやさしくお諭しになった。少年僧達の頬を止めどなく涙が流れた。
続いて山下所長は、藤田康男君（八才）を指さし、「あの子供は原子爆弾の当日、火の中で助かりました子供でございます。（頭の傷の跡を示し）これを御覧下さいますように。原子爆弾の傷の跡でございます。今は良くなりまして、今日では健康になっております。」
と申し上げると、陛下は
「どうぞ大事にしてしっかり勉強してね。」
と、お言葉をおかけになった。藤田君をはじめ子供達は、元気一杯の声で「ハイ！」とお答えした。
孤児の中には、爆心地近い袋町で原爆を受け、右目を失って今なお眼帯をかけ、頭に縫帯をしたまま、お母さん（同所保母）に抱かれてお迎えした宮本六襄君（六才）と、広島駅付近の猛火の中で、息絶えた母親の乳房をにぎって泣いているところを危うく救われた東エイ子ちゃん（三才）の二人がいた。山下所長が東エイ子ちゃんの前で、「陛下、この子をここに連れて参りました時はまだ六ヶ月でございました。」と説明申し上げた。陛下の御目には痛いけな幼い

二人の姿がはっきりと映っていた。

「ああそう！大きくなりましたね。大変でしょうがしっかりやって下さい。」

陛下の御目に光るものがみるみる溢れ、御頬をつたわった。陛下は泣いておられた。一瞬、群衆のざわめきは静まり

〝天皇陛下は泣いておられる〟

との声が人々の中からもれた。いたるところからすすり泣きの声がおこった。そこに集った全ての人々は、その時、確かに大御心の深みに接していた。

山下所長が育成所の方向を指さしながら、「陛下、この子供達はあの向こうに赤い旗がずっと下がっております立派な建物……ずっと上の方に白い旗が立っておりますあの付近一帯の大変いい場所を貸していただきまして、県営建物でございますが、あそこで健やかに、お陰様で、幸せに過ごさしていただいております。」との説明に陛下は

「ああそう！」

と、大きくうなずかれた後、今一度、立ち並ぶ八十四名の孤児の方へ近づいていかれた。そして一人一人の顔を御覧になりながら

「大きくなって、立派な人になって下さいね。」

と、お別れの言葉を賜わった。孤児達はある者は元気よく、ある者は泣きながら「ハイ！」とご返事申し上げた。「陛下、しっかりやります。」との山下所長の言葉を最後に陛下はお車に足を運ばれ、そして万歳！万歳！の声が轟く中をにこやかに次のご視察地へと進まれた。

山下所長は、去りゆくお車を眺めながら「万感胸に満ちて思うていることが言葉になりません。ありがたいことです。」と語った。

広島戦災児育成所は、その後、昭和二十八年広島市に移管され、「童心園」「育成園」を経て、昭和四十八年四月、児童福祉施設としての歴史にピリオドを打った。百七十一人の原爆孤児が育った育成所は、現在は新興住宅に囲まれ、授産施設に姿を変えている。しかし、ここに育ち、陛下の限りない御心にふれ、暖かい励ましのお言葉をいただき、そして今は全国に散らばっている原爆孤児にとって、ここ「皆賀の里」はいつまでも変わらない心のふるさとになっている。

再起誓う原爆の子

――亡き父母を慕い出家の少年僧――

陛下が広島戦災児育成所で御激励になった五人の少年僧は、全国の新聞に報道され大きな感動を巻き起こした。

育生所は五島列島から復員してきた山下義信氏が、原爆孤児の悲惨な状態に心を痛め、私財を投げうって開いたものであった。山下氏が熱心な宗教者であったため、育成所では宗教教育が重視された。子供たちは所内に設けられた童心寺の鐘を合図に起床、朝食前にお参りし、正信偈、十二礼のお経を上げる毎日であった。こうした中で自然と「原爆少年僧」として全国に知られた五人が生まれたのである。子供達が仏門に入るようになった経緯を、山下氏は後に感動を込めてこう記している。

ある日の午後、晩秋の陽が西に回って、うすら寒い風が肌に感ずるような日であった。増田義修君が、はるかに宮島あたりの空をながめながら「お母さんに会いたい。」と言って泣き出した。この子は近頃、この丘の上から向こうの海や空をながめて、ぼんやりとただずんでいることがしばしばあった。

「おじいちゃん。どうしたらお母さんに会えるの。」

「……」

「おじいちゃん、お坊さんになったらお母さんに会えるの。」

私は黙っていることが出来なくなり思わず

「ああ、会えるよ。」と答えていた。

「僕はお坊さんになりたい。おじいちゃん、お坊さんにして下さい。」

増田君はその時十一才の少年であった。父は戦時中に病没し、母と二人で暮らしていた。髪結いだった母は、原爆で悲惨な最期をとげた。増田君の希望は、わずか十一才の少年の希望である。取り上げるにはあまりにも重大なことである。私はこの時、一生懸命考えた。十年二十年の将来について考えた。成人の後、果たして彼がいかなる運命になるかについて深く考えた。……そして増田君の得度に同意しようと決心した。他に希望する少年があるかと数人の男の子を集めて聞いてみた。河村義尚、川井義秀、谷口義春、今田義泰の四君が得度を希望した。……白衣、袈裟、自足袋などの用意をしなければならなかった。自足袋は五日市の松村さんが寄付して下さった。白衣は保母さんたちが涙でこれを縫い上げた。」

（育成の記録第三章より）

昭和二十一年十一月十五日、京都の西山別院で一週間の習礼を終えた五人の少年達は、西本願寺で得度式をすませ、少年僧としての第一歩を踏み出したのである。

少年僧の一人、朝倉義修氏（旧姓増田）は、現在四十九才、真言大谷派山陽教務所長として多忙な日々を送っている。朝倉氏は昭和二十二年の天皇陛下の育生所行幸を振りかえって次のように語っている。

「正直いって当時は幼くてこの重大性がわからなかった。ときに触れて語られる先生方の話を通して、だんだん日を経るごとに実感が湧いてきたのです。（陛下のお言葉）ひと言でしたけど、その中に込められている願いを受けて、真面目にやらんといかんな、と思って現在まで来ました。」

ここにも、陛下の行幸時のお言葉を支えに、戦後を強く生きぬいた一つのドラマがあったのである。

広島県水産試験場

――かき養殖に御関心――

五日市の戦災児育生所を後にされた陛下は、沿道でお迎えする人々にお応えになりつつ、広島市最初のご視察地広島県水産試験場にお着きになった。

試験場前では、高齢者、漁業関係者、一般奉迎者約一万人が歓呼の声で出迎える中、試験場長藤田正氏の先導で正門まで約七十メートルをお歩きになった。正門前に立ち並ぶ、かき養殖

に五十年も従事してきた長岡繁太郎、金森一男、米田米一氏はじめ二十名の功労者の前では、足を止められ

「元気で食糧増産をしっかりやってね。」

と、お励ましになった。

場長の案内で本館二階に上がられ、かき養殖法の模型、かきの産額、輸出額等の統計資料を御覧の後、窓から、折からの引き潮ではっきりと姿を表わした草津湾の杭打ち垂下式かき養殖の様子を興味深げに御覧になった。

その時、突然、万歳のどよめきが海上から聞こえてきた。海上に集まった数十隻の漁船の漁師達が、窓から陛下の御姿を拝して一斉に万歳の歓声を上げたのである。陛下はそちらをお向きになり、帽子を振ってこれにお応えになった。

ついで同場技師竹内卓三氏の説明で、顕微鏡下のかきの幼生（ラーバー）の発育状況を熱心に御観察になり、種がきの採苗方式の説明の際には、付着器に使う貝殻を指さされて

「これに種がきを付けるのだね。」

と、生物学に造詣深いお言葉があった。引き続いて、輸出用かき缶詰、のりとかきのつくだ煮、

乾しかき、かき殻利用の加工品等御覧になった。

かきのむき身作業中の草津町中西静生氏（五十四才）の前では、一歩前に進まれてしばしお目を止められた。場長が「四十年の経験を持っております。」と説明申し上げると

「随分永い間、働いているのだね。しっかりやってね。」

と、やさしいお言葉をかけられた。中西氏は全く思いがけないお言葉に、日やけした頬を感激の涙でぬらすのであった。また陛下は場長をかえりみられ

「垂下式養殖方法になってから衛生的になり、チフスの心配もなくなったね。」

とのお言葉があった。

次の部屋では学術的に有名な佐伯郡木野川上流に産する「川真球」を興味深く御覧になり、特産の鯛の浜焼き、煮干いわし、きんこ、乾えび等を御覧の後、御退出になった。

お車に向かわれた陛下は、車のステップに御足かけられようとした瞬間、急にお振り向きになり、二～三歩後戻りされ、藤田場長の方をじっと見られて

「水産事業は特にしっかり頼みます。」

と、念を押すようにお話しになった。藤田場長は急なことで一言もなかったものの、その陛下の

お言葉に込められた期待と、水産業の復興という自分達の使命の大きさをひしひしと感じたという。

爆心地御通過（相生橋）

——鳴り響く〝平和の鐘〟——

この日、広島市内は文字通り人の波で埋まった。陛下が御通過の道路沿いは、何時間も前から人垣で身動きも取れない有様であった。広島市民二十万のほか、近郊近在からの人出は広島駅を降りたった者で約五万、市内数百件の旅館が全て札止めになったという。陛下のお顔を一目でも拝したいと願う二十数万人が、草津町から元西練兵場、市役所、県庁、広島駅に至る十五キロに押しよせ万歳の歓呼を送ったのである。

草津町の水産試験場を出発した陛下のお車は、古江、己斐、旭橋とゆっくりと市内へ向かって進んでいった。沿道の家々は原爆で火災は免れたものの屋根瓦は飛び、壁は落ち、戸、障子は破れ、戦争の生々しい傷跡を残していた。旭橋を過ぎればそこはバラック街であった。陛下

は沿道を埋め熱烈な歓迎をする人々にお応えになりながらも、未だ広がる原爆の荒涼とした景色の中に立ち並ぶバラック建て住宅、数少ないながらも新築された建造物に深くお目を注がれたようにうかがえた。

午後十一時二十五分、お車は相生橋にさしかかった。二年前の昭和二十年八月六日、午前八時十五分、上空五百八十メートルで爆発、十八万五千余名の生命を一瞬にして奪った原子爆弾の爆心地である。お車は時速四キロ、歩くほどの速さで、欄干が倒れ未だ五十センチほどの穴も空いた相生橋を進んでいった。陛下は元安川の上に浮かぶ〝平和の塔〟を車窓からじっと臨まれた。この時、平和塔上の〝平和の鐘〟がカーン！カーン！と冬空にこだました。同年八月六日、原爆二周年の日に建立され、打ちならされて以来二度目のことである。それは広島市民の原爆の悲劇から立ち上がる決意と、平和への願いを込めて打ち鳴らした平和の鐘であった。相生橋はその時、まさに感激のるつぼと化した。橋を埋めた人々はドッ！とお車に崩れかかり、万歳！万歳！の声は、鐘の音と和して天地に響きわたった。

陛下は相生橋御通過の際の御感慨を次の御歌に詠まれた。

広島（昭和二十二年）

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

この御歌は広島県巡幸から二十七年後の昭和四十九年公刊の「あけぼの集」に於いて発表された。この御歌を拝する時、陛下が原爆を受けた広島に対して、どれほどの深い御心をよせられたかが拝察できる。

かくして陛下は産業奨励館のドーム（原爆ドーム）を右手に見られながら、旧護国神社大鳥居の下を御通過、午前十時三十分、市民奉迎場へと進まれた。

（この御歌は、御在位六十年を祝う年にあたり、陛下の広島に寄せられた御心を後世に伝えるため広島市南区比治山公園に御製碑として建立された。※巻頭グラビアに写真）

広島市民奉迎場

——涙の式典——

相生橋上での感激もさめやらぬ中、陛下は元護国神社前の広島市民奉迎場にお成りになった。

ここに於いて広島市にとって決して忘れる事の出来ない、日本人としての感動と喜びの場面が展開されたのであった。その感激を当時の広島市総務課長小野勝氏は次のように記している。

市民広場には朝まだきから戦災者、引揚者、遺家族、各種団体代表、学生、生徒、児童等を最前列に無慮五万の市民が整然とならんで御待ち申し上げていた。

相生橋御通過を報ずる平和の鐘が響きわたるや群衆はひしめき合い始めた。整理員は御道筋の確保に懸命となる。

御先駆車が式場に姿を現すや会衆の歓呼は爆発した。万歳、万歳、万歳……帽子が飛ぶ、ハンカチが舞う。

御座所近くに御召自動車から降り立たれた陛下は、濱井市長の御先導で数歩を歩まれたが、待ちもうけた内外の奉迎者の群は御身近くまでなだれ寄って御歩行も御難しいほどの熱狂ぶり……

式場の一隅からは広島鉄道管理部吹奏楽団の君が代奏楽が始まる、熱狂も一時静まり君が代の合唱、恐らくは終戦後の広島としては初めての国歌大合唱である台上の陛下も御帽

子をとられて共に君が代を口ずさまれる。何の涙?言い知れぬ国民感情の涙、拭うても拭うても流れる涙…。

やがて濱井市長は感激と興奮に緊張した面持ちで御座所前に進んだ、くり展げた奉書がかすかにふるう。

奉迎の辞

謹んで広島市長濱井信三広島全市民を代表いたしまして奉迎のことばを申上げます。

天皇陛下にはこの度御車を中国地方に進めさせられ本日親しく御健康な御姿に接することは吾等市民の真に感激に堪えないところでございます。

わが広島市は昭和二十年八月六日原子爆弾により壊滅的戦災を蒙りましたが、全市民は凡る艱難と闘いつつ新たなる文化都市建設のため日夜懸命の努力を重ねております。

願わくは特種の戦災を蒙りました広島市に深き御心を御寄せ下さいますことを謹んで御願申上げます。

陛下には無事御巡幸を終えさせられ愈々御健勝に御帰還遊ばされますよう御願申上げます。

力強い濱井市長の若々しい声に、陛下はじっと聞き入られた。市長が御前を退くと、ああ、その時、陛下には静かに御座所のマイクの前に進まれた。式場はサッとどよめく、陛下にはオーバーのポケットから小さな紙片を取り出された、御言葉だ、御間近かに拝する御体から、今、直接に御聞きする御声だ、五万の会衆の眼と耳はジット陛下の御口元に集中された、涙も、声もない一しゅんである。

御言葉

「この度は皆の熱心なる歓迎を受けて嬉しく思う。

本日は親しく広島市の復興の跡を見て満足に思う。広島市の受けた災禍に対して同情はたえない。

我々はこの犠牲を無駄にすることなく平和日本を建設して世界平和に貢献しなければならない。」

一語一語、ハッキリと力強く耳を心を打ったこの御言葉、原爆の惨苦をなめた市民に注がせ給う大御心の有難さ、かたじけなさ会衆はあの日の苦しみを一しゅんに忘れた如く御声に聞き入った。水を打ったような静けさも御言葉が終わると同時に破れた、どっと上がった万歳の声、再び飛ぶ帽子、舞うハンカチ、溢れる涙、こんな国民的感激を、こんな天皇と国民との感情の溶け合いを、何時、何処で、誰が味わったであろうか、市議会議長寺田豊氏が唱えた万歳の姿も声も、眼に耳に入らぬ感激、興奮が渦巻いた。

寺田議長の万歳が終わっても、陛下はしばし台上に留ませられ、群衆の熱狂ぶりに御満足気に見入られた、そして御帽子を高く差し上げられて、再三、再四遠く、近く、左に右にいとも御ていねいな御会釈を賜りながら御座所を降りられ御機嫌麗しく御召車に入られた、時に十時三十五分、万歳の歓呼は止みもせず、御名残りを惜しむ市民の群は涙とほこりにまみれながら御車を囲み、御後を追うのであった。

（小野勝著　「天皇と広島」より転載）

天皇陛下を広島にお迎えして

広島県立広島第一高等女学校　第二学年　児玉　蓮子

十二月七日十時三十分―

天皇陛下はいよいよ原爆の都広島の地をおふみになった。護国神社跡まで奉迎に出ていた何万の市民は一目でも陛下を拝見しようと大人も子供も必死だった。陛下はいよいよ壇上にお立ちになった。我らの象徴たる天皇を眼前に拝して、私は何とも言えない感激に満たされた。陛下はまもなく広島市民に対しお言葉をかけられた。そのお言葉、そのお声、陛下は如何に我々広島市民のことを御案じになっていられるかがわかる。又陛下は支那事変、そして太平洋戦争さえも、初めから御反対なさったとの事を、前に新聞で見たが陛下はほんとうに平和を心から愛されるお方だ。今こうしてお迎えしたのはまるで夢のような気がする。今までは天皇陛下とかけ離れていた私達だが、今こうして目の前にお姿を拝したり、又ラジオを通じたり直接お声を聞いたりすることの出来たのは私達にとっての大きな喜びである。そして今はもう、もったいない事ながら私達のやさしいお父様のような気さえする。お風邪をめしながらも御巡幸になり、一々激励のお言葉をおかけになる陛下、おやさしくてお情深い陛下、これこそ平和日本のシンボルに適わしていお方だ。そして陛下は仁のお方だ。たとえ単なる人間になられたとしても天皇はどこまでも天皇だ、今後天皇を中心とした、平和な国が実現しなければうそだ。それには若き者の力が必要だ。私達の力で、真の平和国家を建設して陛下に安心して頂きたい。「陛下やります、私達若き者の情熱をもって、平和日本の建設のためにどこまでもやり抜きます」私は心の中でこうつぶやいた。

天皇陛下の行幸に際して

広島女学院　三年二組　梶尾　善枝

十時半過、陛下は奉迎台の上にお立ちになった。一瞬緊張した空に破られた。手を、帽子を、ハンケチを、狂ったように振る。陛下は一寸帽子をおとりになり答礼遊ばされた、やがて静かにおこる国歌「君が代は千代に八千代にさざれ石の…」ああ！この時湧き上る感激の涙を誰が止め得ようぞ、長い間指折り数えてこの日をまっていた私達の天皇陛下が今こそ私達の前にお立ち遊ばされたのである。頬に流れ伝わる涙を拭おうともせず唯一生懸命に歌ったのであった。おやさしい温和そうなその御顔！そして一般の民と一寸も変わらぬ質素な御姿！今日の奉迎者の中には、きっときっと陛下のおめしになって

いる御洋服よりもっともっと立派なものを着ている人もあろうに！この寒空にあのような御洋服では御風邪をおめしになっていらっしゃるのに、ひどくおなりになりはせぬだろうか？…と心配であった。陛下の御日常も私達と同じように御不自由なことが推察された。今や終戦後、三年になるのにまだ一寸もまとまりがつかず、陛下にもこんなに不自由な生活をおさせ申し上げることは非常に畏れ多いことではないか、これも皆んな私達の力が足りないからだと思うとあまりのはがゆさに又も涙が頬を伝うのであった。やがて広島市長の奉迎並びに報告の御挨拶がすんで陛下の御言葉を給った。拡声器を流れ出て来る陛下のおやさしい御声！やがて湧き起こる万歳の声、声のあらんかぎりを出して叫ぶ、おお！陛下にはそのお帽子をお取りになり高く高くさし上げて答礼遊ばされたではないか――万歳万歳！――終わりの方は熱いものが胸にこみあげのどがぐうぐうとなって声が出ない、唯手を力一杯振るのであった、そのうちに陛下は台をお下りになり御召車にめされて静かに御退場遊ばされたのである。実に感激の一瞬間であった。ああ、いつまでもいつまでもこの感激の嵐の中にもまれていたかった。

授産共同作業場

――子供の元気な返事にご微笑――

元護国神社前、市民奉迎場を御出発の陛下は、左に営団住宅、右に市営住宅の建ち並ぶバラック住宅街を通られて、恩賜財団同朋援護会広島県支部経営の第一授産共同作業場にお成りになった。場内では、同作業場従業員の家族、社会事業関係者、広島母子寮員、民生委員、開拓団代表、そして似島学園、新生学園の可憐な孤児達やシーファー神父に引率された長束カトリック愛児園のかわいい子供達のお迎えを受けられた。

同場長渡辺礼一氏が先導申し上げ、まず社会事業関係者の前では

「しっかり社会奉仕を頼みますよ。」

と、一人一人に帽子を取ってご会釈になった。かわいらしい各学園の孤児、園児達の前では、足を止められ、一人一人の顔を見回されながら

「明るく立派な国民になってね。」
とのお言葉、子供達が一同元気よく「はい！」とお答えすれば、陛下もやさしく微笑された。
開拓団体委員長藤田守登氏（三十三才）には
「いろいろ困難なこともあろうが食糧増産のためしっかりやって下さい。」
と御激励、感極まった奉迎者の一人が「天皇陛下万歳！」と叫べば、場内外、せきをきったように「万歳！万歳！」の歓呼が上がった。
戦災者、引揚者などの生活困窮者四百余名が働いている同授産場の鼻緒工場、ミシン補導所、木工工場製作品陳列所を親しく御視察になったが、同工場に働く母に連れられた森永智夫君（十二才）を場長が説明申し上げると、陛下は
「しっかりやってね。」
と、お言葉をかけられた。森永君はそのお言葉に、慈父を見上げるごとく嬉しそうに「はい！」とお答え申し上げたので、陛下は思わず微笑され、しばし足を止められた。
陛下をお見送りした渡辺場長は、次のように、その感動を語っている。
「天皇陛下には中国地方御巡幸遊ばし、当授産場に御来臨遊ばされ喧騒極まる塵埃の屋内作

業現場の実情及び製品を御覧遊ばされ一々御激励御慰労の御言葉を賜りました。
陛下の御温情溢るる御英姿御仁愛の御言葉に接し一同感涙に咽ぶ次第であります。私等援護生産の事業に従事する者は今日の善き日を記念し更に業務に精励致しまして平和国家建設に微力を盡す決意であります。」

御説明

私が場長渡辺礼一市でございます。
只今から御先導申上げます。
ここに陳列致しておりますものは当授産場の製作品でございます。
只今従業致しておりますものは約四百名でございましてその内で約二十名がこの場で働いております。自宅で内職として働いて居りますものが約二百八十名でございます。
その大部分は戦災者と引揚者でございまして一部の生活困窮者も働いて居ります。
これ等従業者の収入を申上げますと技術者で多く取りますものが一日百七八十円でござ

います又少ないものが未経験のもので一日四十円位でございます平均致しまして一ケ月千七百八十円となっているのでございます。

ここは花緒部でございましてここに働いて居りますものの外は自宅で家庭内職として働いているのでございます。花緒は廃品屑物を裁断致しましてミシン縫を致します、それから色々の色に染めまして花緒に造るのでございます。この花緒は学校の生徒や引揚者戦災者用として配布所で配布致して居ります。

ここは洋裁部でございまして六ケ月の基礎講習を致しまして技術の習得が出来ました上で洋裁店なり洋裁技術者として独立が出来るのでございます。

ここは雑品更生部でございまして入手致します資材の都合で色々のものを造って居ります。只今造って居りますものは、幼児の下駄でございます。この廃品は元爆弾に使っておりました薬嚢でございます。これを染めまして此の下駄を造っておりますがこれ又端切で造花を作って居りまして屑切れを次々と更生致すのでございます。

ここは下駄部でございまして下駄を作ります。順序を申上ます。

初めこの様な木取りを致しまして、次に両端にこんな鋸目を入れまして、次に糸鋸で二

つに挽き離しましてこの仕上機に入れます。そう致しますと裏は全部仕上がるのでございます。これを丸めまして三個の穴を明けまして表を手押鉋でけづりますと全部仕上りまして出来上るのでございます。

ここは挽物部でございまして色々と注文がございますので仕事は定まって居りませぬが、主に電気器具と学校の教材ものが多くございます。只今作って居りますものは、学校の教材用の計数器でございます。使いまする材料は下駄を取りました廃材をなるべく使用致しまして仕事を致して居るのでございます。

ここは玩具と塗装でございまして、挽物部で造りました計数器だの、その他の廃品の木箱等を塗りまして手提金庫の代用品又は救急箱などを造って居ります。ここにございます木箱は新制中学校で使用致します裁縫箱でございます。

袋町小学校と第五中学校

――喜びを胸に…――

授産場を御出発の陛下は、次の御視察地である袋町小学校と新制第五中学校の併設されている旧袋町小学校へと向かわれた。今一度陛下のお姿を拝したいと市民奉迎場から溢れ出した人々で、紙屋町、本通り商店街は身動きも取れない有様であった。その中を分け入るようにお車は進み、予定より九分遅れて、午前十一時八分、戦災の跡も生々しい旧袋町小学校へ到着した。そして直ちに、袋町小学校校長石井義夫氏の先導で御便殿にお入りになり、石井校長、第五中学校校長上田只介氏からの奏上を受けられた。

奏　上

広島市立袋町小学校長　石井　義夫

天皇陛下中国御巡幸の御事どもを承り、御巡路御つつがなくわたらせられるよう日夜児童と共にお祈りしお待ち申し上げておりました。

謹んで広島市袋町小学校の概要を申し上げます。

本校は明治六年二月二日下中町戒善寺内に就将館として創立し、その後袋町に転じ、桜川小学校、温知小学校と改称し、播磨屋町に移転し播磨屋小学校と称え、明治四十三年袋町小学校として再び現地に移ってまいりました。

昭和二十年四月疎開のやむなきに至りましたので本県双三郡の四個村八ケ寺に教官小丸九郎以下職員十六名は児童三百六名と共にまいりました。約一千名は縁故疎開、約百名は本校にとどまりました。

原子爆弾により当時の学校長小林哲一以下職員十二名、児童六十五名は戦災死し、鉄筋三階建の内部と講堂は全焼のため授業も一時中絶のやむなきに至りました。

昭和二十一年五月一日授業再開、児童四十名を収容いたしました。

現在は学校長石井義夫以下職員十八、児童五百五名在籍し、校舎の復興工事も本年度に入り着々進んでおります。

職員児童共に心を合わせて新日本再建に打ち込んで努力いたしている次第でございます。

奏上

広島市立第五中学校長　上田只介

謹んで広島市立第五中学校の概況を申し上げます。

本校は本年四月十五日開校、生徒は一年生四百七十八名、二年生百名、三年生十三名合計五百九十一名、学校長以下職員二十二名でございます。校舎は目下当袋町小学校二階一教室、三階六教室及び県立広島第一中学校に三教室を借りております。明春までは新校地に校舎ができる予定になっております。

生徒はこの廃墟に等しい中にありましても極めて元気に明朗に新日本建設は先ず私達からといった気持で勉学にいそしんでおります。殊に男女共学につきましても不安なく将来を大いに期待しております。職員もこの困難な社会状勢下にありまして志操堅固よく耐乏生活の中に生徒と共に楽しく努力を続けております。

今回の行幸の光栄は永久に伝え善美な校風を樹立し有為の材を育成致しますことを御誓い申し上げます。

旧袋町小学校は爆心直下の本川小学校と並んで最も被害が大きく、多くの犠牲者を出した学校であった。陛下は両校長の奏上に、時折、

「うん、うん。」

とうなずかれ、奏上を終えて退出しようとする両校長に

「戦災校として御苦労に思います。どうかしっかりやって下さいね。教育は重大だから、いま言ったようにしっかりやって下さいね。」

と御言葉をかけられた。両校長はお返しする言葉もなくただ感激の涙にむせんだ。両校長は陛下をお見送りした後、次のようにその感激を述べている。

「数多い学校の中から私共の学校が行幸の光栄に浴したことさえ感激の外ありませんのに、奏上を終わってホッとして退出しようとした瞬間、突然ありがたいお言葉を賜わり、電気に打たれたというか、名状し難い感動に身も心もうち震う思いでした。あの力強いお声、夢かと疑い

たい位ですが、今尚耳の底に、心の奥に焼きつくように残っております。生徒と共にあの日の感激を無にしないよう努力することあるのみです。」

奏上の後、石井校長の先導で二階にお上がりになった陛下は、廊下に陳列された袋町小、五中の生徒の作品を御覧になった。とりわけ、袋町小六年生の田中明子さんが、爆心地近くで収集した典型的な原爆瓦三点については、殊のほか興味深げに御覧になった。

つづいて、袋町小学校教官高井正文氏担当の六年生の国語の授業「星の光」を御視察後、第五中学校教官城太郎氏担任の英語の授業を御覧になった。窓のすき間から吹きすさぶ寒風にもめげず、粗末な机と腰掛けで元気よく勉強に勤しむ生徒の姿に、陛下は暖かいまなざしを注がれていた。

校庭に設けられた奉迎場に、袋町小・五中の生徒職員、市内小中学校長、遺族、引揚者等、約五千人がお待ち申し上げる中、陛下はお立ち台に登られた。全員声を感動でふるわせながら「君が代」を斉唱した。陛下は帽子をお取りになり、右手に高々とさしあげられると、幾度も幾度も全員の歓呼にお応えになった。丁寧な御会釈を最後に陛下が台を降りられようとすると、人々の万歳！万歳！の声が嵐のように巻起こった。それはやがて嗚咽へと変わっていった。陛

下は何かをおっしゃりたいように何度か口を動かされたがすでに御予定の時刻は過ぎ、間もなく、お車の人となられた。

陛下が御出発の後、校庭に残された生徒達は陛下がお立ちになったお立ち台にかけ寄っていた。少しでも陛下の温もりに接したいと思ったのであろう。台上には陛下の靴に付いていた土がほんのわずか残っており、その土をそっとなでている生徒の姿もあった。

天皇陛下をお迎えして

広島市袋町小学校　五年　川本　修三

十一月初めの朝会で校長先生が、ぼくたちの学校に天皇陛下がおいでになることにきまりました。広島では、袋町校がただ一つですとお話なさいました。それからぼくたちは先生と一っしょに、毎日のようにあちこちと少しづつでもきれいにして、お迎えしようと一生懸命お掃除をしました。いよいよ十二月七日その日となりました。なんだかうれしいようで、胸がわくわくします。十一時ごろ自動車の音がしました。先生の号令がかかりました。

いよいよ天皇陛下がぼくたちの学校にこられたのだと思ったらのどがこくんと音をたてぼくは思わずつばをのみこみました。ぼくたちのいつも通る廊下をお通りになって、ひかえ室におはいりになって、お休みになりました。ぼくたちがいつものぼるかいだんをのぼられて二階の六年生の勉強をごらんになって、そまつな新制中学の教室に行かれる途中の廊下で陛下は帽子をとられてばんざいの声におこたえになられました。そのお姿は映画でみたお姿そのままでした。ぼくはあのお姿を永久に忘れることはできません。いよいよ陛下はぼくたちの前にお立ちになりました。ぼくは君が代の歌も声がかすれてよく

歌えませんでした。陛下のお顔はなんだか心配そうに見えました。そしてみんなつらいこともがまんしてよく勉強しお国のために世界平和のため役にたつりっぱな人となってくださいとおっしゃられているようでした。ぼくはあとから校長先生が、陛下からたいへんありがたいおことばをたまわりましたとおっしゃられた時何ともいえないありがたいきがしました。ぼくは陛下のお心を心としてこのめいよある袋町校生徒としてはづかしくない人間になりたいと思います。

広島県立第一中学校

御予定より十三分遅れて午前十一時半、陛下は広島県立第一中学校にお着きになった。原爆の惨禍は、ここにも生々しい傷跡を残していた。校庭の一角には、未だ鉄筋コンクリート造りの講堂の残骸が無残な姿をさらし、紙張り障子のバラック校舎には、美しかったかつての一中の面影は見られなかった。

二十二年前、陛下は皇太子時代にもこの一中にお立ち寄りになった事がある。同校と広島師

範学校とのサッカーの試合を御覧になったのである。運動場を取り囲むように植えられたポプラやユーカリの大空をつくようにそびえる姿、あたりの風景に見事に溶け込んだ美しい校舎。今やその昔の姿を全く留めていないとはいえ、無言のまま歩まれる陛下の姿には、当時の想出を深くしておられるお気持ちがありありと拝察された。

数田猛雄校長の先導でバラック校舎の中に進まれた陛下は、先ず教官木村太郎氏が担当する五年一組の数学の授業を御視察になった。

御入室に先だち、陛下はオーバーと帽子をお取りになり、一同に対してご会釈された。木村教官による解析幾何の講義に無言でじっと耳を傾けられ、講義が進むにつれ、何度も何度も深くおうなずきになった。

次いで教官蒲地玄三郎氏担任の五年四組の生物学「伝染病を防ぐ法律」についての授業を御視察された。生物学は陛下の御専門のことでもあり、殊の外御興味ありげに聞き入られ、数田校長が次への御案内の合図をさし上げてもお気付きにならず、再度の御案内にようやく御退出になる御熱心さであった。一つ一つの出来事に全身全霊を込めた真心で対される陛下のお姿は、巡幸の先々でお迎えする人々の心にさわやかな感動と、深い確信を呼び起こすのであった。

校舎を御退出された陛下は、約九百名の全校生徒、教職員、父兄、同校卒業生、市内各学校長らがお出迎えする中をグランドにお出ましになった。この時も陛下は、出迎えのものに対して、丁寧に御会釈することをお忘れではなかった。

運動場では、川村毅教官の五年生のサッカー、東側では橘高教官指導の四年生によるバスケットボール、南側では林弘教官指導の二年生による短距離走が繰り広げられていた。元気に満ち溢れた白シャツ、白パンツの若人達が笛や小旗の指揮ではつらつと動きまわる姿を御覧になった陛下は、御満足の御様子であった。

やがてお車に召された陛下は、職員生徒の万歳の嵐の中を市庁舎に向かわれた。

校長謹話

かつては皇太子としての行啓を仰ぎ、今又陛下を御迎え申し上げたことは本校職員生徒、父兄、卒業生一同の終生の光栄とするところであります。実に民主的な陛下の御健康な御姿を御側近くに拝し御言葉さえ耳にした私は感激の極みであります。七十余年の輝く伝統

と六千名の卒業生をもつ本校も学制改革によって近くその名は変わります。けれども、一中の名の最後の年に我等の陛下を御迎えした光栄と感激は次への躍進、新制高校への大きな動力となり、伝統の「がん張りズム」は永久不変にますますそのスピリットを発揮することを確信致します。

我等の陛下よ！永遠に御健勝たれ！

待望の十二月七日は来る。初冬の風は冷たく木枯らしの吹き狂う中を今ユーカリの残墟が寒むざむと明けてゆく。早くも市民奉迎場を目指す人の列が言い知れぬ喜びと緊張の内に進んで行く。九時頃から時を追って登校してくる生徒も清潔な服装で、皆本校に行幸を給はるといふ誇りを充満させながら何処か落ち着きがない。通路と表玄関に竹ボウキの目が加えられる。やがて集合の鐘が鳴りひびき、市内各中学校長、一中の諸先生達が奉迎位置につく。そこで再び奉迎についての詳細な御注意が加えられる。南運動場には早くも周囲にぐるりと人垣をつくり、表門の前にも溢れ満ちて人波を打って居る。

シルクハットを片手に燕尾服をスマートに着込まれた小柄な校長が御通路を際巡され、幾つかの小石を拾われた。校内の雰囲気は刻々と緊張の度を加え御来校の時刻は熱して行く。突如として静寂を破る

警備車の到着である。続いてクリ色の御召車が到着し、灰色の質素な外套を召された陛下が御下車遊ばされた。先ず五年一組と四組の授業を御覧遊ばした陛下には、南運動場で一途にお待ちして居る在校生徒の前にお立ちになった。吾々の感激の最敬礼をお受けになった後、御帽子を右手にかざされつつ南運動場へとお出ましになり、伝統ある蹴球その他の意気潑剌たる熱血児の健闘をば御覧遊ばすことしばし、校長の鄭重なる説明に始終御感慨深げにおうなずきになった。折から期せずし起こった歓呼の声は寒空にとどろく。人垣は突如として怒濤をなし、陛下を慕ふあまりの万歳に一中はわれんばかり。帽子を持った小さな手を振れども万歳が口から出なかった子供。涙にむせぶ老婆。将にに感激のクライマックス。外人記者はこの熱狂ぶりに小首をかしげて居た。斯くして陛下には本校行幸をおえさせ給ひ、御乗車になり、そして帽子で会釈し給ひつつ市役所へお向いになったのである。後は大海の嵐が去った鏡の如き静けさを思はしむ一抹の淋しさが取り残された。陛下には多少お疲れの様子が伺われたが、一外人記者も語った如くに偉大な気品と沈着を保っていられた事は、日本国民として誠に喜悦に耐えない事実である。ここに陛下の御健勝と御長寿を乾坤神仏に熱願すると共に陛下の御期待に応えて平和国家建設に努力し、アトム広島をして世界平和の発祥地たらしむ覚悟を新にした次第である。

（「広島県立一中新聞」昭和二十二年十二月二十三日号）

広島市役所

――屋上から市内を御展望――

県立第一中学校を出発したお車は、沿道を十重二十重と囲んだ人垣の中を広島市役所へと向かった。途中ではボーイスカウトをはじめとして消防団員多数が交通整理に当たっていたが、陛下をお迎えする市民はお車の通過とともにその人垣を崩し、お車の後を市役所前へと殺到した。やがて市役所の自動車庫や付近の民家の屋根、垣の上まで鈴なりの人だかりとなった。「天皇陛下万歳！万歳！」の歓呼の中、御予定より五分遅れて午前十一時四十分、陛下は市役所正面玄関へとお着きになった。玄関前では浜井信三市長、奥田達郎助役、森沢雄三助役、寺田豊市議会議長、山木茂副議長、さらに玄関内大廊下では各課長、係長がお出迎え申し上げた。浜井市長の先導で二階に進まれた陛下は、正面大廊下に整列してお迎え申し上げる市会議員三十九名、そして浅野長武氏以下市政功労者二十五名にご会釈されつつ市長室に入られ浜井市長からの市政奏上をお受けになった。

市長奏上

謹んで広島市長浜井信三市勢の一班に就て奏上申しあげます。

広島市は太田川の三角洲上に発達した都市でございまして今から凡そ三百五十余年前天正十七年に毛利輝元がこの地に城を築きましたのが、その始めであります。その後福島正則が一時城主となり、更に浅野長晟が、紀州和歌山より移封されまして、爾來明治維新まで二百五十余年の間浅野氏に於て藩を始め広島の基礎を固めたのであります。

明治時代に入りましては、広島県第一区より広島区時代を経て、明治二十二年四月市制施行と共に、広島市と称することになりました。同年十一月には、時の広島県知事、千田貞暁が五年の星霜を費し苦心を重ねました宇品港が、竣工して一躍本市は我国海陸交通の重要拠点となったのであります。

越えて明治二十八年の戦役に当りましては、本市は陸軍の輸送基地としてその任を果すと共に、大本営を当市に進められ七カ月の永きに亘って明治天皇の御滞在を恭う致しまし

た。

今日陛下の御使用に供しました御椅子及び机掛は、当時明治大帝から本市が拝領して記念として保存いたしておるものでございます。

爾來本市は陸軍運輸部の所在地となり戦役、事業の影響に依りまして市勢は著しく躍進いたしました。

昭和七年には広島県に於て、広島港修築の工を起し、更に市内の水害防止のため太田川の改修工事に着手し同十六年には工業港修築のため市の南方地先の埋立工事が進められました。

欺くて昭和十六年頃には、本市は戸数十万余、人工四十一万を数え中国地方に於ける政治、経済、文化の中心都市として自他共に許して居りましたが、昭和二十年八月六日原子爆弾により都市部四百万坪は焦土と化し、その他の家屋も尽く破壊せられ、為に死者行方不明併せて九万二千余人、重軽傷者三万七千余人を出しまして一時全く混乱状態に陥りました。

然し、残存した市民は間もなく平静を取り戻し焦土の中にあらたなる都市を再建せんと

する機運も漸く昂つて参りまして、同年十二月には全市民を網羅する広島市復興会が誕生し、昭和二十一年二月には新たに本市の機構に復興局を設置すると同時に復興審議会を創設し、諸般の復興計画を進めてまいりました。

復興計画に当りましては、先づ応急復興として道路の清掃、庶民の住宅の建設、物資配給機関の整備、学校交通機関水道の復興、橋梁の架設、保健衛生並びに戦災者引揚者等の援護施設の整備等に力を尽すと共にそれと併行して恒久的復興計画を樹立してまいりました。今や応急復旧は略々完了し夫々不十分ながら機能を発揮しております。

欺くて今日本市の人口二十二万二千余、戸数五万五千余を数えるに至り商工業も漸次復興の機運に向ってまいりました。

恒久的復興計画に当りましては平和の記念都市として国際的文化都市を建設することを理想として諸般の計画を進めております。

その計画の概要は図面により別室に於て後刻御覧願うことといたして居ります。然しその計画を実施いたしますには多額の経費を要し仮復興に約十六億円本復興に約六十億円の経費を要する見込みでございましてこれが財源を如何にして得るかが今日私共に課せられ

た重大なる課題でございます。

本市復興に関しましては、又進駐軍に於ても強い関心をもたれ英米両軍より種々好意ある援助を受けております。

今や本市の復興は世界注視の的となって居ると仄聞いたします。私共はその期待に副ふべく凡ゆる困難を克服しまして、理想の実現に邁進いたす決心でございます。

尚私共は全市民の盛り上がる意思により本年八月六日戦災二周年記念に当り平和祭を挙行いたしました。その趣旨は広島の戦災によって得た諸々の教訓を全世界の人々に伝え将来欺る悲惨事を世界の何處においても再び繰返さないやうに警告して聊かでも人類の福祉増進に貢献することが出来るならばそれこそ本市の犠牲を最も意義あらしめるものであると考えたからに他なりません。

陛下に於かせられましては広島市民の平和的文化的都市建設の念願と永遠の平和を心から祈念する心情に対し深き御賢慮を賜わります様悃願申上げます。

以上謹んで市勢の一班に就て申上げた次第でございます。

浜井市長の読み上げる奏上文に、時折小さくうなずかれながら耳を傾けられておられた。浜

井市長は奏上中特に、陛下の御使用に供した椅子および机掛のことについて説明申し上げた。市長室にこの日のために備え付けられた椅子と机掛は、五十数年前の日清戦争時、大本営を広島市にお進めになった明治天皇がご使用になられ、大東亜戦争の激化と共に疎開されていたため原爆の難より免れたものである。陛下は御祖父明治天皇を偲んでおられるのか、お懐しげにじっと見入っておられた。

市長の奏上が終わると、陛下は市長公室にお入りになり、陳列された原爆参考品や広島市の特産物、英連邦軍から寄贈された同軍航空隊撮影の広島市航空写真等を御興味深げに御覧になった。特に原子爆弾の高熱で焼けただれた瓦や煉瓦、小石の前では、その説明書と何度も見比べになり、また、「プリスライト」という中国塗料株式会社出品の昆虫をあしらった製品の前では

「どの会社の出品かね。」

との御質問もされた。

天覧品一覧

展覧品	点数	出品者
広島市航空写真	一	英連邦軍寄贈
広島市勢一般図	十一	広島市役所
広島図譜	二巻	政本泰典
原子爆弾参考品		
竹	二	広澤彰、藤本正一
玉砂利	三	広島文理科大学
安山岩	一	同
花崗岩	一	同
瓦	一	同
煉瓦	一	同
広島市特産品		
祇園坊柿	二箱	本田屋
牡蠣	二十二	広島県牡蠣株式会社
すき海苔	二箱	広島県海苔荷受販売加工株式会社

展覧品	点数	出品者
広島市特産品		
和傘	八足	谷口興市、西村武志、笠井信八 竹越重丈、高本乙次郎、伊藤倉敏
下駄	八足	沖田孝栄、中澤秀吉
草履	十足	板野博勝、沖田實穂、森本忠八 高橋辰三、広島履物有限会社
盆栽	六	土井卯一、田中朝市、多野田昇 岩田梅蔵、山本勝、谷貫一
銅虫品	三	伊藤久芳堂、河井孝二
プリスライト	一箱	中国塗料株式会社
清酒	十八	小泉万次郎、倉本保吉、田邊秀吉 原九蔵
罐詰	三十五	広島県合同罐詰株式会社
人造砥石	五	亀川多吉
縫針	額一	広島県縫針工業協同組合
ゴム製品	三十	中国西部ゴム工業協同組合
製綿	十五	藤野製綿株式会社
佛壇	四	新藤佛壇工場、三村覚 山田徳次郎、高山理

この度の広島市役所行幸は市長以下、議員一同の熱烈な願いの中で実現したものであった。広島県行幸が決まった折、市会議員団は是非とも市役所に行幸していただきたいとの熱望から県知事にあてて「広島市役所に天皇陛下御巡幸を仰ぐよう県当局に対する陳情書」を提出した。

広島市役所に天皇陛下御巡幸を仰ぐよう県当局に対する陳情書

戦災以来、我が広島市民は凡ゆる苦難と闘いながら平和の都広島の建設に邁進して居ります。

この秋に当って本市が今上天皇陛下巡幸を仰ぎますことは、本市の最も光栄とするところでありまして、本市は斉しく感激し奉迎の日を一日千秋の思でお待ち申上げて居ります。

而して、この千載一遇の好機に原子爆弾を受けた市内をつぶさに御巡視を賜わり、市民は戦災による尊い犠牲者と共に赤誠を披瀝して奉迎することの出来る歓喜に既に満ちて居ります。

本市会は、市民の哀情に副い奉迎に万全を期するため、新たに奉迎準備委員会を組織して目下基の準備中でありますが、市内の御巡幸個所につきましては出来る限り市民の興論に副ふよう御取計を願ひます。

つきましては、本市の代表機関である広島市役所には是非行幸を賜わりますよう、御配慮の程懇情いたします。

申すまでもなく貴職に於ても、事情御賢察の上広島市役所に御巡幸相成るよう当然御配慮頂いて居ることとは思いますが、本問題は全市民が挙げてこれを熱望して居りますので、市民を代表する本市会は之が実現の為、満場一致これを決議し、特に陳情して強く要望する次第であります。

昭和二十二年十月二十五日

広島市会議長　寺田豊

広島県知事　楠瀬常猪　殿

このような市長以下、議員団の熱望で実現した市役所行幸の御日程は、いよいよ市役所屋上からの広島市内の御展望へと移った。

この日、広島は乳白色の雲が空をおおい、周辺の山々も、そしていつもなら青い海に浮かぶ瀬戸内海の島々も霧に包まれて見ることは出来なかった。しかし陛下が広島市街地全域を御展望されるには十分であった。

陛下が市役所屋上にお姿を見せられると、周囲の路上から万歳！万歳！の声が湧きあがった。陛下は思わず足をお止めになり、帽子を右手で幾度も幾度も振られて市民の歓呼にお応えにな

った。陛下は浜井市長の説明に

「ああ、そう。うん、うん。」

とうなずかれながら、眼下に広がる原爆被災地広島、復興広島双方の情景に御目を注がれるのであった。

展望台よりの市長説明

謹んで御説明申し上げます。

只今お立ち遊ばします所は、ほぼ市の中央に当ります。北部より御説明申し上げますと前方約一キロの所に鉄骨の円い屋根の建物がございますが、あれは元広島県産業奨励館でございましてあの建物の東南方約百米、高度約五百七十米の箇所が原子爆弾の爆心であったと称されております。爆心地を中心に約二キロの半径で描いた円内が焼失区域でございます。

戦災直後は堅牢建物の残骸と焼残りの樹木の木株が点々と残って居るのみで見渡す限り

の焼野原でございましたが、御覧の通り今では二万五、六千の家屋が焼跡に建築されて降ります。

「奉迎式場」

又産業奨励館の向う側の建物が広島商工会議所でございましてその北側の元護国神社前広場で本日奉迎式を行ったのでございます。

「広島城、大本営跡」

更にその北方一帯が旧広島城跡でございましてその本丸の中に天守閣や旧大本営跡があったのでございますが何れも戦災で全壊又は焼失いたしました。

「広島駅」

広島駅は丁度この方向に当ります。

「比治山」

この向うの小山が比治山でございまして市立公園の一つでございます。あの山の北端を平に開きましてそこに第五帝国議会が本市に召集されました時の仮議事堂内の御便殿を奉安いたしておりましたが戦災の際爆風によって全壊いたしました。

「宇品港」

南にまいります向うの林の上が向宇品でございましてその左が宇品港であります。

「広島商港、飛行場、造船所」

その右側がさきに修築いたしました広島商港でございましてその更に右側が工業港として海面を埋立てた所でございます。今は一番東側の埋立地を飛行場に江波と観音の地元の埋立地には三菱造船所が出来ております。あの起重機の並んでおります所がそれでございます。

「文理科大学」

あの建物が広島文理科大学でございます、構内に高等師範学校、付属中学校、付属小学校がございましたが尽く焼失いたしました。併し今では大学、中学校、小学校は応急の復旧を了え授業を行っております。

「江波山、仁保山、二葉山」

あの山が江波山でございます。こちらの山が仁保山でございます。古い記録によりますと比治山もこれ等の山も尽く湾内の小島でありまして遙かあの二葉山のふもとに船を繋い

だと言われて居りますことは洵に興味あることと存じます。以上概要を御説明申上げます。

〝天皇陛下と原爆被災地広島〟この劇的な感激の瞬間を待ちのぞんでいたのは、市民や議員団ばかりではなかった。各社の新聞記者、写真班、放送局、市内各学校の新聞班は、陛下の一挙手一投足を一つも見逃すまいと必死に待機していた。中でも陛下のすぐお側に接して取材していた幾人かの学校新聞班の豆記者たちは、この時の感激を次のように語っている。

広島女子専門学校三年の永島千代さん（十九才）は「陛下がおやつれになっていたので『おいたわしい。』と感じたが、沿道の群衆の熱狂的な歓迎を見て陛下がお喜びになられたろうと思い、安心しました。」

同校二年生澄谷三枝子さん（十八才）は、「無雑作に着ておられる御服装や御動作を間近にみて、親しい感情を覚え、敬愛の念を深めました。

広島県立女子高校の突永陽子さんは、「民衆の熱狂的歓呼に、陛下は帽子を何度も高く上げられてお応えになりましたが、終始お親しい感じがしました。」

放送局のマイクには陛下のお声がはっきりとキャッチされている。

「割合に建物ができたんだね。」

と浜井市長にお話になられている。陛下は原爆を受けた広島市が着実に復興に向かっている姿を御覧になり、広島市民の努力を実感された御様子であった。

御展望を最後に陛下は市役所玄関前にお出ましになった。そのせつな、奉迎者の列は崩れ、お車に迫り、陛下がご出発の際には、MPのジープが御通過を助けねばならない程の混乱ぶりであった。万歳！万歳！を連呼し御車に崩れかかる市民の波に、陛下は右に左ににこやかに微笑みかけられながら御予定の午後十二時二分、市役所を御出発になられた。陛下が中国巡幸を終えられた後、広島市議会では次のような「天皇陛下本市行幸に対する感謝決議文」を決議し、陛下への感謝の気持ちをあらわした。

天皇陛下本市行幸に対する感謝決議文

今般天皇陛下中国地方御巡幸の為、去る十二月七日、本市に陛下の行幸を仰ぐことができましたことは本市の最も光栄とするところでありまして、市民は夙に歓喜して此の日をお待ち申し上げ、至誠をこ

めて奉迎し、尊顔を拝しては崇敬の念いよいよ昂まり、感激の裏に奉送申上げた次第であります。

我々市民は未曾有の戦禍を蒙り、其の後旬日ならずして終戦の悲運に遭遇し、一時は全く虚脱状態に陥りましたが、日時の経過するに従ひ漸く次第に平静に復し、新日本建設の光明を認め、郷土の復興に努力して今日に至って居るのであります。

然しながら復興は至難な大事業でありますので、遺憾ながら遅々として進捗いたしません。此の苦難と戦いながら我が国の前途を惟う時、天皇陛下の御心情を拝察して洵に恐懼に堪えず、感慨無量なるものがあります。

私どもは既に徒に過去を追うことを止めて、禍を転じて福となす決意の下に新生日本の為に民主化の徹底を図り、平和の実現に一路邁進して居る次第であります。

此の尊い事実こそは、即ち天皇陛下の御仁徳を基のまま顕現することに外ならないと固く信じて疑いません。斯く観ずる時、油然として陛下を敬慕するの念湧き起り、自ら理論を越えて此の地に陛下をお迎え申上げたいとの純情が胸に満ち、此の熱望が速かに達成されるよう切望して止まなかったのであります。

幸にして今回の我等の宿願が達せられることと相成り、初冬の佳き日陛下をお迎えして、本市の政治、教育、産業、厚生等の各観点からそれぞれの箇所に於て、御疲労の御身にも拘らず新しく御視察を賜はり、剰え有難き御激励の御言葉を頂戴いたしました事は、関係者一同の深く感銘するところであります

が、就中奉迎式場に於て特に本市民に賜わりました優渥なる御言葉は、全市民の心膳に深く刻まれ、温き御論には二十萬市民が悉く感泣して、感奮興起し世界平和の実現を固く固く御誓ひ申上げた次第であります。

供養塔に眠る多数の尊い犠牲者達も遺族と共にその栄光を分ち、静かに無言の内に奉迎して居た事と信じますが、図らずも侍従の御差遣を賜り、陛下の深い御仁慈に感極って新日本建設の礎石となったことを今更の如く喜んだことと察します。

又、爆弾症になやむ不幸な患者達も侍従の御手厚い御慰問にあずかり、高恩の有難きに感涙を禁じ得なかった事と信じます。

極めて御繁忙な御日程の裡にも、かくも御心を砕かれまして行き届いた御視察を賜わりましたことは、全市民挙って感謝感激に堪えない処であります。

謹んで厚く厚く御礼を申上げます。

全市民は行幸を仰いで全く安堵し、天皇陛下の御健康を衷心より御祈り申上げながら、新しい覚悟の下に必ず御心に御副い申上げることを固く御誓い致しております。

昭和二十二年十二月十二日

広島県庁

――県民代表の奉迎にお応え――

広島市会議長　寺田　豊

陛下は、市役所を御出発され、沿道の人々の熱狂的な奉迎の中、電車通りを南に御幸橋、皆実町を経て広島県庁へと向かわれた。特に千田町、広島日赤病院前には、原爆一号患者として有名な吉川清氏をはじめ、多数の患者が看護婦や医師に付き添われて奉迎申し上げた。

広島県庁奉迎場で、県庁、広島財務局、中四国土木出張所、地方経済安定局などの職員、地方事務所長、町村長、一般奉迎者約六千人がお待ち申し上げる中、予定より少し遅れ　十二時二十分に陛下はお着きになった。

奉迎場の台上に立たれた陛下は、楠瀬県知事の「天皇陛下万歳！」の三唱にお応えになり、直ちに県会議事堂で地元選出の代議士、県議会議員にお会いになった。議長室で御昼食をお取りになった陛下は御小休の後、午後一時十四分、県庁職員、一般市民のお見送りのうちに、広島駅に向かってお車で御出発になった。

供養塔と日赤へ侍従をお差し向け

陛下は、広島市お成りに際して、特に中島本町の原爆死没者供養塔と、千田町の日赤広島支部病院へ永積侍従をお指し向けになった。

供養塔では陛下の御名代として懇ろに焼香、祈禱して原爆犠牲者の霊を弔い、日赤病院では、一室に待つ原爆患者十二名に対して、一人一人患部に手をあてて慰問激励した。

なお、陛下は二年前、永積侍従を、戦災慰問のため広島市にお差し向けになったことがあるが、今度も前の晩、陛下から急に思召があって急遽、代参することになったものであった。

広島駅

――国鉄労組代表を御激励――

広島市内巡幸の御日程を無事終えられた陛下は、出汐町、的場町、荒神橋を経て午後一時二十五分、広島駅にお着きになった。直ちに広島鉄道管理局のブラスバンドによる「君が代」の吹奏が始まる。お車をお降りになった陛下は、広島鉄道管理局長小畑靖氏の先導で取り囲む奉迎者にお応えになりつつ、地下道から第二プラットホームへと進まれた。

ホームには、広島鉄道管理局職員代表、同労組代表、戦災職員遺家族、県市議会議員等がお見送りのためお待ち申し上げていた。職員、労組代表には

「運輸事業は大切なものであるから、しっかりやってもらいたいものだね。」

ついで戦災職員家族七十余名には

「苦しいでしょうが明るい気持ちでやってくださいね。」

とのねんごろなお言葉をおかけになり、感涙にむせぶ整列者に一々会釈されつつ、菊花御門章の輝くお召列車にお乗りになった。陛下はただちに御自ら窓を開かれようと窓にお手をかけられた。ガラス越しにその御様子を拝した県市会議員は押さえ切れぬ感動に泣いた。

窓は陛下のお手ではなかなか開かれず、それに気づいた側近が走り寄ってお開き申し上げた。陛下は、お顔を窓からお出しになりお見送りの人々に慈父のような御微笑を右へ左へと投げかけられた。人々の列はにわかに崩れ、天皇陛下万歳！万歳！の歓呼の嵐が巻き起こった。

定刻の一時三十分、御召列車は静かに動きだした。一人の外人記者が「グッドバイ！」と叫べば、陛下はにっこりと微笑えまれてお応えになった。

広島市民にとっては余りにも短い夢のような半日であった。見送る人々はプラットホームから列車が見えなくなっても何回も何回も万歳を繰り返し、しばらくは頬に流れる涙を拭おうともせず立ちつくしていた。

外人記者の見た「天皇陛下と広島」

天皇陛下が原爆を受けた広島市へ行幸される。それは世界の注目するところであった。陛下の回りでは、わざわざやってきた米、英、仏、濠の有名な新聞、通信、映画社の一流特派員が熱心な取材を行った。彼らが「天皇陛下と広島」をどのように見たか、当時の中国新聞に載った記事から拾ってみる。

○インターナショナル・ニュース・サービス紙エメリー記者談（市民奉迎場にて）

「日本でこんな盛観を見たことはなかった。想像以上に群衆が多かったのには驚いた。」

○パラマウンド映画カーテー技師談

「早速本社へ空輸して来週のニュースに五種類にわけて上映する。破壊された街の風景や、元産業奨励館の鉄骨と天皇が同一場面に映写されるから、これを見るものは何か感じるものがあろう。」

○アクメ紙フアガーソン記者談

「天皇は大分疲れておられる。しかしこの市民の熱狂では疲れも忘れさぞ喜んでおられることだろう。平和の天皇にふさわしい人だと思う。」

○ノースアメリカン紙フオース記者談

「天皇はいい人だ。市民は涙を流して奉迎に熱狂しているが、これが日本人の真の国民性なのだろう。美しい光景だと思う。」

○ロンドン・デリー・ヘラルド紙デルトン記者談

「英皇帝を御迎えする時のロンドン市民の熱狂を想い出す。この市民の万歳の嵐は天皇の御心をゆすぶるものがあろう。」

○フランス・プレス紙プルー記者談

「こんな混雑では天皇はゆっくり原爆の地を見られることが出来ないだろう。閉戦のゆかりの地だから君主としてやはり感慨無量だろうと推察する。」

○ニューヨーク・ヘラルド誌ゼイモンド記者談

「アトム・ヒロシマに来ていかなる強力な武器でも戦争を根絶することは出来ないと思った。世界の平和は平和愛好の国民によってのみ保たれると思った。」